御館前(みたちまえ)遺跡発掘調査現地説明会資料

令和5年(2023年) 9月3日(日)／公益財団法人滋賀県文化財保護協会

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。
公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages

遺跡と調査の概要

遺跡の概要　御館前遺跡は近江八幡市千僧供町に所在し、弥生時代から鎌倉時代にかけての集落跡・郡衙(ぐんが)跡・墓跡として知られています。遺跡の範囲内には、古墳時代中・後期(約1,500～1,400年前)の古墳群である千僧供古墳群があり、県史跡に指定されています。また、本遺跡や周辺の遺跡からは奈良時代(約1,300年前)の墨書(ぼくしょ)土器や木簡(もっかん)等の文字資料が出土していること等から、古代の蒲生郡(がもうぐんが)衙関連遺跡であると推定されています。郡衙とは現在の「市・町」のような地域行政区分である「郡」を治めた役所であり、その郡司(ぐんじ)とよばれる役人のトップには地方豪族が任命され、蒲生郡一帯を統治していました。同じ地域において古墳群が造営された後に郡衙が設営されていることから、この有力者たちは古墳時代から飛鳥・奈良時代の間、現在の千僧供町付近を拠点として、継続的に統治していたと考えられます。

調査の概要　公益財団法人滋賀県文化財保護協会では、滋賀県東近江土木事務所が計画する近江八幡竜王線道路整備事業に伴う発掘調査を令和4年（2022年）9月より実施しており、現在も調査継続中です。

昨年度の調査では、弥生時代後期(約1,800年前)の竪穴建物(たてあなたてもの)5棟、古墳時代後期(約1,400年前)の竪穴建物4棟、鎌倉時代(約800年前)の掘立柱建物(ほったてばしらたてもの)2棟と土坑墓2基を確認しました。また、今年度の調査では、古墳時代中・後期(約1,500～1,400年前)の竪穴建物8棟、鎌倉時代の掘立柱建物5棟をそれぞれ確認しています。これらに伴い、当時の煮炊きや盛り付けに使われた土器(弥生土器・土師器(はじき)・須恵器(すえき)・黒色土器等)、石器(磨製石斧(ませいせきふ)・砥石(といし)・台石(だいいし)・剥片(はくへん)・石槍(いしやり)・勾玉(まがたま)・臼玉(うすだま)・紡錘車(ぼうすいしゃ)等)等が出土しています。

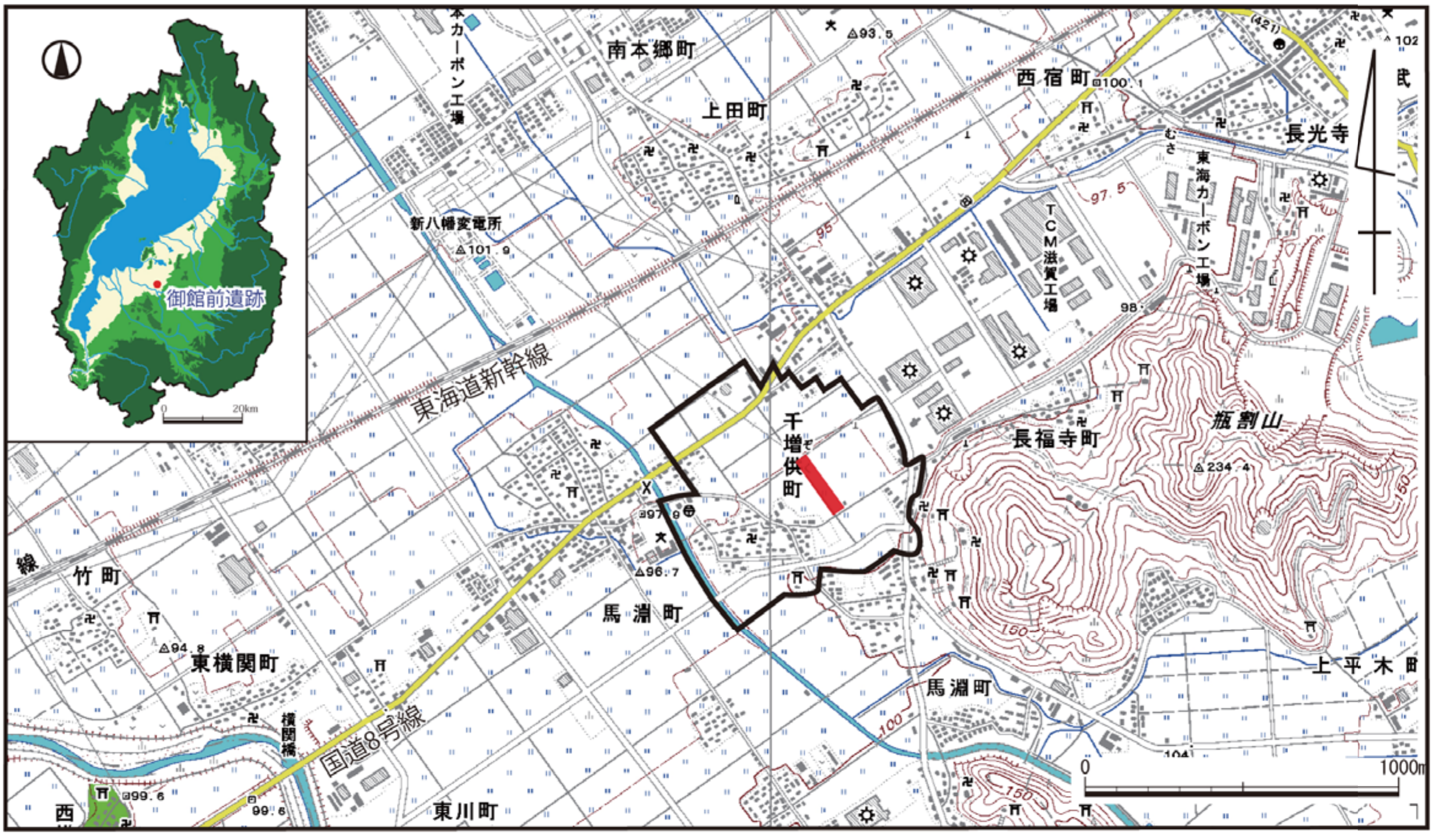


図1　御館前遺跡の範囲（黒枠）と今回の調査地点の位置（赤塗）

古墳時代の竪穴建物の発掘調査成果

調査区外に続く竪穴建物①

建物の柱穴を掘る

調査区北西部の竪穴建物

調査区北西部で確認できた３棟は近接して重なっており、建てられた時期はそれぞれ前後します。建物①は壁に板を並べ立てて土留めをしています。建物③は、建物②が利用されなくなった後、建てられていました。その建物③の柱穴は 0.8m 以上の深さで掘りこまれており、一棟の建物に柱穴が８基以上存在することから、同じ場所に２回以上建て直しをしていたと考えられます。

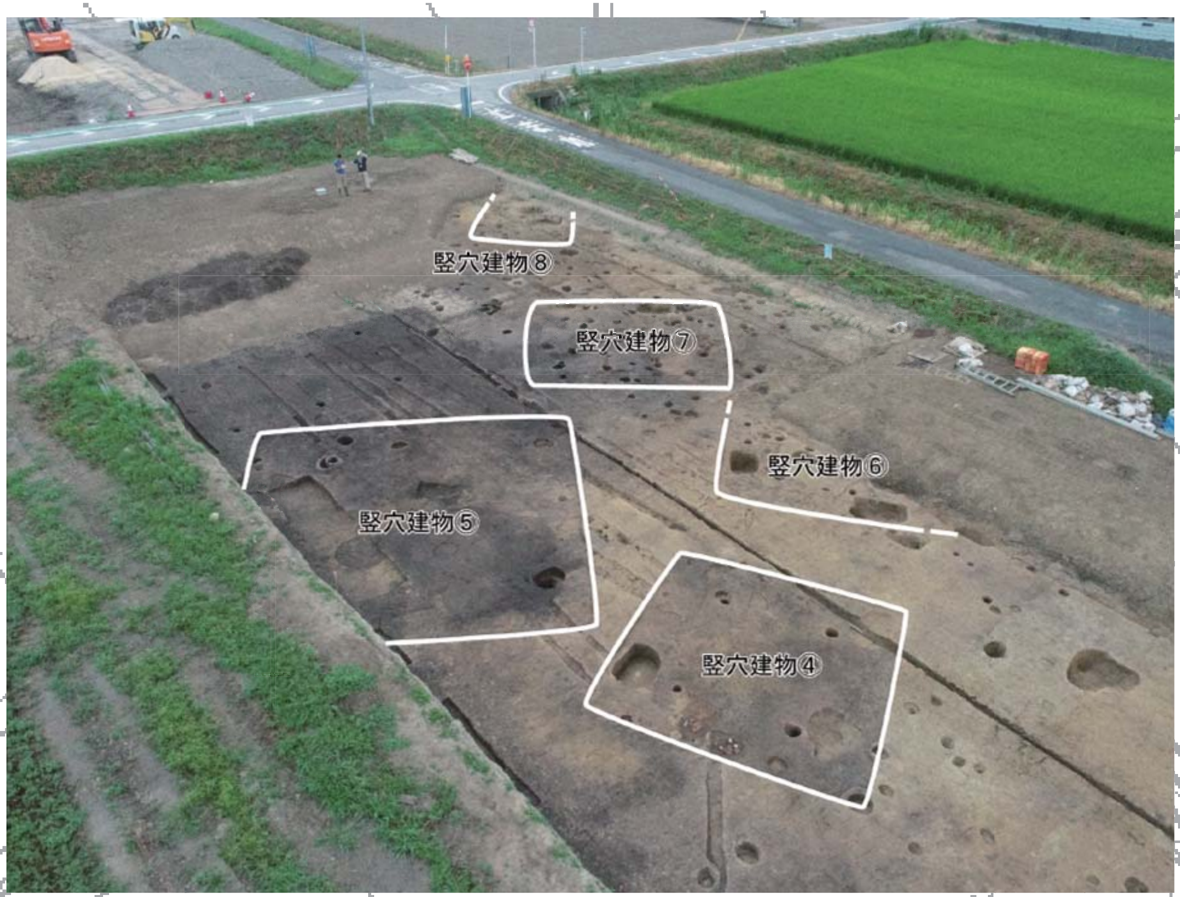
重複する竪穴建物②・③

千僧供町地域歴史資料館

本日、千僧供町で発見された歴史資料を公開中

密集する竪穴建物

建物の一辺は、3.5m ～ 8.6m と建物の規模に多様性がみられますが、おおむね 5m前後の大きさの建物が主流であったようです。竪穴建物①～③、竪穴建物④～⑧では、建物と建物の間隔が 10m 未満と狭く、竪穴建物の分布にはある程度のまとまりがあります。

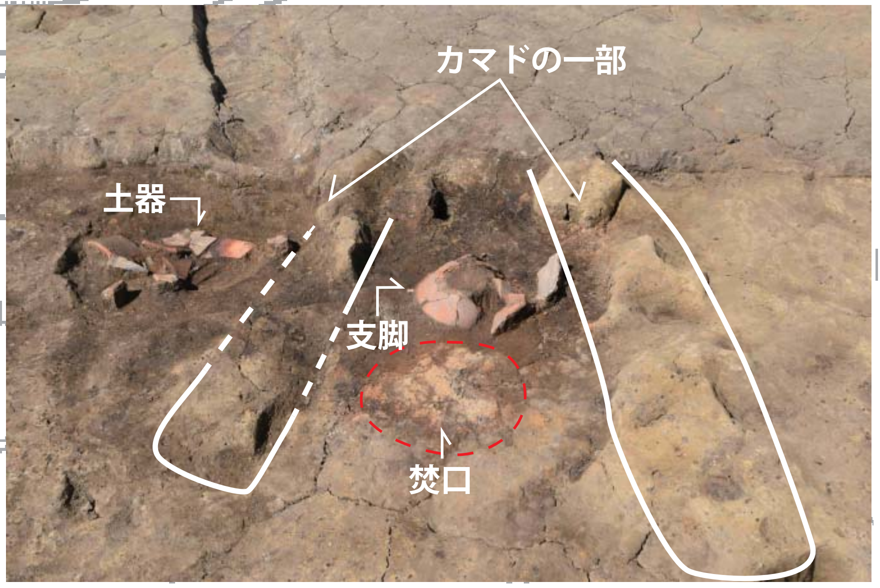


密集してみつかった竪穴建物④～⑧

建物をつくった時の掘削痕

竪穴建物⑪の調査風景

カマドのイメージ



竪穴建物④に伴うカマド

古墳時代の炊事場ーカマドー

竪穴建物④・⑦・⑫の壁沿いには、ドーム状の調理施設であるカマドが設けられ、その焚口は赤く被熱していました。カマドの周辺には、煮炊きに使われたと考えられる土器がカマド外面へと崩れるように出土していました。竪穴建物④と⑦のカマドでは、盛り付け具である高坏をひっくり返し、支脚として転用することで、燃焼効率を高める工夫がみられました。

滑石製の臼玉

石製の紡錘車

出土した遺物

当時の人々が利用していた道具が見つかっています。食べ物を盛り付けるための高坏、装身具の臼玉や勾玉、糸を紡ぐための紡錘車などが出土しました。

土坑内で発見した高坏

図2　千僧供古墳群の分布図（近江八幡市史編纂委員会2021に加筆）

表1　既往の調査成果と今回の調査成果

		約1,700年前			約1,400年前			約800年前
時代区分	**弥生時代 後期**	**古墳時代 前期**	**古墳時代 中期**	**古墳時代 後期**	**飛鳥時代**	**奈良時代**	**平安時代**	**鎌倉時代**
既往の発掘調査	竪穴建物 方形周溝墓		住蓮坊古墳 供養塚古墳	トギス塚 岩塚古墳 （大将軍塚） （ラカン塚）		掘立柱建物 →蒲生郡衙推定		
今回の発掘調査	竪穴建物群		竪穴建物① 竪穴建物②？ 竪穴建物④ 竪穴建物⑤ 竪穴建物⑥ 竪穴建物⑦ 竪穴建物⑧？	竪穴建物③ 竪穴建物⑨ 竪穴建物⑩ 竪穴建物⑪？ 竪穴建物⑫？				掘立柱建物 土坑墓

まとめ―今回発見した古墳時代の竪穴建物と千僧供古墳群との関係

今回発見した建物群の周辺に所在する千僧供古墳群は、かつて十数基の古墳が存在していたと伝えられており、馬淵（まぶち）町から千僧供町にかけての平野部に分布しています。これらの古墳のうち、古墳時代中期の住蓮坊（じゅうれんぼう）古墳と供養塚（くようづか）古墳の2基、古墳時代後期のトギス塚古墳・岩塚古墳の2基、計4基が現存し、5世紀中ごろから7世紀にかけて、約200年にわたる在地有力者の系譜をたどることのできる古墳群です。

このように同一地域において長期的に継続して造営される古墳群は全国的にも稀です(近江八幡市2014)。

古墳時代中期以降、この地域一帯では古墳が継続的に造営されていた一方で、これまでの発掘調査では、古墳群と同時期の、首長たちを支えていた人々の集落跡がほとんど確認されていませんでした（近江八幡市2021）。

そうした中で、今回の発掘調査では、古墳時代中期後半から後期にかけての竪穴建物を12棟確認することができました。それらは既往の調査で空白となっていた時期に帰属する竪穴建物群です。これらの竪穴建物群の位置は、住蓮坊古墳と供養塚古墳の中間地点からやや南にずれた場所です。墓域と居住地が同一エリア内に存在することから、竪穴建物群を営んだ人々は、これら古墳群の被葬者と深い関係があったことが示唆されます。今回の調査を通じて、古墳時代の集落と古墳造営の実態をうかがわせる重要な知見を得ることができました。

参考文献　近江八幡市（2014）『近江八幡の歴史　第六巻　通史Ⅰ』
近江八幡市（2021）『近江八幡の歴史　第九巻　地域文化財』